

## 展覧会主旨

大谷地下美術展 ' 88

「MELTDOWN の危機」・・・ものいわぬ集団

大谷地下美術展も今回で5回目を迎えます。今まで自由参加という形をとってきましたが、5年目を迎える今回は、この展覧会で何をし、何が為されたかをもう一度問直してみるために、企画展といたしました。

今回は、急激に情報化され、管理化されている経済と管理、この二本立ての社会の中で活動し続ける美術家と、同展覧会との関連を個々の具体的な作品、というよりむしろこの場の持つ意味を社会の中の枠組み的な見地から考えました。時代は少し遡りますが、戦後から今日の日本の経済的復興を見るに至るまで多くの象徴的事柄がありました。労働者我労働の人権のために立ちあがり皇居の橋を赤い血で染めたこと、学生たちが学園や社会の民主化を叫び、その蒼き胸を躍らせたこと、選手の中に多くの自殺者をだした東京オリンピック、『いつでも夢を』がキューポラの町に流れ、ささやかな心の支えとなったこと。しかし、これらは高度成長という最も重要な転機と共に、よき思い出に変わり、ノスタルジーとなり、心優しき中年の酒の宴に花を添えています。この高度成長を立案した宮沢喜一氏は、「こんなにうまくいくとは、おもわなかった。と、言っていました。この、「うまく」の中には、どんな意味が含まれているのでしょうか。インタビューの中で彼のほくそ笑む顔がとても印象的でした。

この政策が意図したものは、大衆化そのものではなかったのではないのでしょうか。より多くの人々が、同じような生活をするということ、つまり、同じようなものを持ち、同じような考えを持つということ。これは、多くのものを大量に生産し、消費する、経済システムを活性化させる上で十分な材料といえます。また、このA=B=Cという大衆化こそが、すでに見えない管理の始まりともいえます。しかしながら、この初期段階の管理は、多くの問題を残したまますでに、次の段階（フラストレーション時代）にはいったと思います。その一例として、私達は、日常「雑踏の中の孤人」という光景に出会います。満員電車の中で必死に本を読む人、ウォークマンを聞き音楽に陶醉しているひと、これらの人たち、少なからず、この満員電車の状態を不快と感じている反面、その中に自分の部屋の空間を導入することで、一時の安らぎをつくり、自己の心理的安定を計っているようにも思えます。しかも、こうした一見閉鎖的に見えるこの様な状態も、読んでいる本、聞いている音楽、は現代の経済システムの中から、高度に採択されうみだされたもので、彼等は、これに寄りそうことで少なからずこの不快感から逃れていると、私は思います。

しかし、これはこの状態に対する抜本的解決にはなりませんし、ここで生じた体制の問題は問わず、その一方、その中でささいな安心を克ち取ろうとする考え方が生まれます。これは、或る意味で個の孤立、すなわち、ものいわぬ集団、この集団を作り上げるために、経済とシステムから作り出された副産物（美術）があるとしたら・・・この様な箱庭的個人主義は、日和見的優柔不断さとともに、管理社会への道をひた走るように思えます。これは目に見えない御仕着せのようで、日常いたる所に網の目のように張り巡らされ、能動的意識を害しているようです。こうした日本のあり方は、随分前から多くの人々に指摘され、いまさら持ち出しても・・・という感じもありますが、このいまさらこそがクセもので、いまさらという言葉の中に、物事を風化しようとする、体制側の合理が隠されていると思います。しかも、こうしたあり方は、以前にもまして、ますます色合いを濃くしてきているように思います。

この見えざる管理時代、大谷地下採掘場跡もむろん管理されている一つの場にすぎません。しかしこの場が作家に多くのイメージを起草させるのはなぜでしょうか。第一回展より提唱され続けた作家自らが見つけ、創りだそうとしている新しいシステム（作品と場の関係）に、あるとおもいます。誰がなずけたか、現代美術、大衆化を急ぐあまり管理の海へ身を投じようとしています。美術と縁遠いこの地で今こそ私達の言葉を作りだそうではありませんか。大谷のひんやりとした空気、寡黙なまでに時を刻みこんだ石壁の前では、作り手が常に仮想していた大衆は、従来の位置と方向を持った美術と共に、その姿を消し、作り手自身に深く内在していた大衆との会話がはじまります。その時みいだした内的システムこそ、決して括られることのないこの見えざる管理時代を超えるメッセージではないでしょうか。